フェレンツ・モルナール作『リリオム』の日本における受容史 -翻訳と演劇上演-

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2021-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: フォルゴー, テオドーラ マリア メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21805

２０２０年度　文学研究科

博士学位請求論文（要旨）

The Reception History of Ferenc Molnár's 'Liliom' in Japan
— Translations and theatre adaptations —
（フェレンツ・モルナール作『リリオム』の日本における受容史— 翻訳と演劇上演—）

独文学専攻
Forgo Teodora Maria

１　問題意識と目的

フェレンツ・モルナール（1878 年ブタペスト～1952 年ニューヨーク）はハンガリーの国民作家であり、ハンガリー語で書かれた作品はドイツ語と英語にほとんど翻訳され、この翻訳によって世界的作家になった。代表作である戯曲『リリオム』は、ベルリン及びウィーンにおけるドイツ語上演の成功によって、ハンガリーでも認知されるという経過を辿っている。日本でモルナールを最初に紹介したのは森鷗外であり、散文形態の『リリオム』及び会話体短編作品『辻馬車』と『最終の午後』をドイツ語テキストから訳出している。欧米におけるモルナール受容史についてはドイツ語、英語で書かれた優れた業績があるが、日本におけるモルナール受容の様態に関する研究は部分的なものに留まり、資料に基づく文献学的・体系的記述は皆無である。日本におけるモルナール受容は鷗外に始まり、その後も別の翻訳者による新たな翻訳が続くばかりでなく、築地小劇場による上演から宝塚歌劇団さらに榎本健一のピエル・ブリヤントにおける上演まで多様な形態で展開することになる。本研究の目的は、日本におけるモルナール受容に関する広範なデータを収集し、それを体系的に記述する方法を示すことによって、これまでの研究上の欠落部分を補うばかりでなく、英文で発表することによって国際的なモルナール受容の議論に参加し、さらに日本における今後の研究展開の基本文献となることにある。本研究のデータの収集・整理はモルナールの全作品に及ぶが、翻訳や上演の形態についてはモルナールの代表作『リルオム』を分析の対象にする。

２　構成及び各章の要約

本論文は以下の 6 つの章と補填、及びモルナール受容に関する統計データ「モルナール作品の日本語訳リスト」と「モルナール作品の日本における上演リスト」から構成されている—

1. 序章—国際性とマリチメディア性の観点から見たモルナールの生涯と作品（Introduction — Molnár's life and works - Focusing on internationality and multimedia）
2. 欧米におけるモルナール受容史研究の系譜と日本の研究状況（Genealogy of reception history research regarding Molnár's works in Europe and America and the research status in Japan）
3. 受容史記述の方法論（Methodology of reception history description）
4. 日本におけるモルナール受容史の概略—統計に基づく翻訳及び演劇・映画上演の歴史的分析（Overview of the reception history of Molnár's works in Japan - Historical analysis of translation and theatre adaptations based on statistics)
5. パラテキスト理論に基づく『リリオム』の翻訳分析–ペリテキストを構成する要素を中心に（Japanese translation analysis of 'Liliom', based on paratext theory – Focusing on elements that form the peritext)
6. 『リリオム』の上演受容史（Theatrical performances of 'Liliom' in Japan）

補填 漫画メディアによる『リリオム』翻訳（Translation of 'Liliom' by manga media）
モルナール作品の日本語訳リスト（List of Japanese translations of Molnár's works)
「モルナール作品の日本における上演リスト（List of performances of Molnár's works in Japan)

第 1 章では、ハンガリー文学のなかで特にモルナールの作品がヨーロッパ文学水準に達していく過程を、モルナールの生涯（翻訳家・ジャーナリストとしてのヨーロッパ文学に関する広範な知見や優れた外国語能力など）とオーストリア・ハンガリー二重帝国という歴史的背景に基づいて分析した。オーストリア・ハンガリー二重帝国（1867 年～1914 年）と合併都市ブダペスト（1873 年）の生成は密接に関係しており、モルナールは新しい首都ブダペストが生んだ作家として認知されていくことになる。モルナールが成長していく過程とブダペストの言葉の生成がリンクしている点についても論じた。また、欧米におけるモルナール受容が書籍形態に留まらず、演劇・映画上演というマルチメディア性を示している点にも言及した。第 2 章では、ドイツとアメリカにおけるモルナール受容史の記述を紹介した。エリーザベト・ラジェック（Elizabeth Rajec）とジョージ・ナジ（György Nagy）というドイツ文学者による受容史記述に注目し、特にラジェックは図書館司書の経歴を踏まえ受容史に関する詳細なデータを処理し、優れたプレゼンテーションを実現していることを紹介した。日本におけるモルナール受容に関する本論文の統計データの収集と記述は、ラジェックの業績から多くの示唆を受けている。日本のモルナール研究としては、徳永康元、粂栄美子、深澤晴美の業績を紹介しながら、それらが欧米のモルナール受容の記述に比して十分とは言えない研究状況を明らかにした。第 3 章では、翻訳や上演を受容史の文脈のなかでどのように分析する可能性があるのかという点について、アンソニー・ピム(Anthony Pym)の翻訳史記述とジェラール・ジャネット(Gérard Genette)のパラテキスト論を紹介した。ピムは受容史における翻訳の系譜学の必要性を説いており、本論文はピムの主張に沿う形で、翻訳テキストの生成する歴史的環境（当時の文学潮流、出版状況など）の再現を目指す点を強調した。また、ジャネットのパラテキスト論が書籍の現象形態を構成する諸要素の分析を重視している点に注目し、本論文における翻訳テキストの分析に関して、翻訳のタイトルの付け方、表紙の構成、前書き及び後書きの機能、翻訳者の略歴の記載方法、出版広告の様態などを取り上げる方向性を打ち出した。また、上演分析については、芸術性の高い上演と商業劇場における上演を同時に記述するために、都市文化の生成と劇場展開の関係を分析する方法の有効性を強調した。第 4 章では、『リリオム』に関する詳細な検討に入る前に、モルナールの作品全体について翻訳の概観を示した。モルナール受容のデータに基づく複数のグラフを作成し、いつ、誰が、何を、どのような言語から翻訳したかについて、それぞれの傾向を客観的に示した。このような統計的考察と歴史環境分析（日本とハンガリーの関係史、文学潮流、翻訳者の渡航の可能性など）を組み合わせることによって、日本におけるモルナール受容の全体的傾向を明らかにした。このような分析を通して、モルナールの作品のなかで翻訳と上演の二つの領域に渡って最も積極的に受容された作品が『リリオム』であることを抽出した。第 5 章と第 6 章では『リリオム』に焦点を絞って、同作品の受容の様態を具体的に分析した。第 5 章では、同じ翻訳者の複数の出版形態（鈴木善太郎訳：4 回、徳永康元訳：2 回）と小山内薫訳及び飯島正訳の 1 回の出版、総計 8 冊の書籍翻訳について、パラテキスト論に基づきながら日本の読者にどのように提示されたかを具体的に分析した。『リリオム』の表題の付け方、原作者モルナールの表記の異動、刊行本のサイズ、文字の種類、紙質の違いなどに注目して、翻訳の提示の仕方を示した。また、『リリオム』は戦前特定のテーマで編集されたシリーズ本のなかの一つの翻訳として紹介されることが多かったが、戦後は単行本による出版形態を取るようになり、徳永康元訳が岩波文庫で刊行される経過などについても言及した。鈴木善太郎訳の戦後の再出版に際して、欧米における映画上演における『リリオム』人気を反映して、表題の付け方に大きな変化が見られる点などについても指摘した。第 6 章では、『リリオム』の演劇上演について、いつ、どこで、誰によって上演されたかに注目しながら、日本特に東京の演劇・劇場展開における『リリオム』の受容の様態を分析した。戦前では主に築地小劇場などの新劇のエリート層によって『リリオム』の上演は担われていたが、しかしその戦前においても榎本健一のピエル・ブリヤントにおいて 2 回の上演を果たしている点などに言及した。戦後の東京における商業劇場の展開のなかで、特に宝塚歌劇団による上演は注目すべきものであり、『リリオム』がアメリカにおいて『回転木馬』という表題でミュージカル化され、その上演形態を宝塚歌劇団が採用していく過程について論じた。『回転木馬』はオリジナルの『リリオム』とは場所の設定や筋の展開などで大きく異なるが、『回転木馬』版『リリオム』が日本で広く人気を博していく

様相を具体的に分析した。補填において、『リリオム』が少女雑誌「ひまわり」「女学生の友」「りぼん」のなかで漫画として、小学生から高校生までの世代に広く読まれた現象を取り上げた。本論文の最後に、『リリオム』を含むモルナールの全作品の翻訳リストと、舞台パンフレットから再構成した上演リストを掲載し、今後の日本におけるモルナール研究の基本文献となるように構成した。